

平成28年度 第1回進路指導研修会 記録

- 1 日 時 平成29年2月21日(火) 13:00~15:30
2 場 所 静岡県私学協会(5階)
3 研修目標 「来たる教育改革に知力と活力で対処する」
4 内 容

(1) 部会長挨拶 : 静岡北中学校・高等学校 廣住 雅人 校長

時候の挨拶、出席者に対するお礼の言葉、今回の講演会のテーマ設定の意義とねらいについて述べ、講演会の講師の雨森 聡先生の紹介をした。

(2) 講演

演題: 「高大接続システム改革の概要と大学の入試改革の動向」

講師: 静岡大学 全学入試センター 准教授 雨森 聡 様

FDとはFaculty Development(教育改善)の略称でミクロレベルにおいては各授業の内容、マクロレベルにおいてはカリキュラムの検証・改善を行う職務で、アクティブラーニングをどのように導入するかに取り組んだ。

IRとはInstitutional Research(機関調査)の略称で大学の財務・研究・教学関連のデータの集積と分析を行っている。具体例としては留年・退学をする学生にはどのような特性があるのかを分析して、入試の方法が影響しているのであれば、改善を提案する仕事である。

今回の指導要領の改訂で世間を賑わせているアクティブラーニングは、大学においてはずいぶん以前から求められてきている内容である。今日の講演においては平成28年3月の中教審「高大接続システム改革会議」の最終報告、及び8月の「高大接続改革の進捗状況について」の内容を中心にふれる。

・高大接続改革の狙い—「学力の3要素」の育成と伸長

「学力の3要素」とは、これからの「予見の困難な時代」、「先行き不透明な社会」に生きてゆくために必要な能力で、具体的には①知識・教養 ②思考力・判断力・表現力 ③主体性・多様性・協働性のことを指す。この3要素を中・高の教育では育成し、大学入試で多面的・総合的に評価し、大学教育において伸長させることを目指している。

そして、「学力の3要素」をキーワードにし、大学入試の改革を起点に、高校教育、大学教育の改革を進める。つまり、中学校、高等学校の授業内容を変えるために大学入試を「学力の3要素」に基づく入試に変える狙いがある。

・入試改革のスケジュール

平成32年度(33年度入試、現在の中学2年生)から新テストの導入(現行のセンター試験はあと4回)。教科・科目は2年前に公表するので平成30年度までには入試の内容が少し見える。大幅な変更は無く、現行のセンター試験の延長線上のものと記述式の問題の組み合わせと英語4技能のスピーキングの導入(外部検定の利用)と

思われる。ただし、実施時期や採点、システム変更の経費や受験者の負担費用等に関しての問題点はある。本格的に大学入試が変わるのは学習指導要領改訂（平成34年度）後、新課程の教育を受けた生徒が受験する平成36年度（現在の小学校4年生）からである。大学側も平成36年度に合わせてアドミッションポリシーを大きく変えようとしている。

- ・学習指導要領の見直し

改訂時期は平成34年度で大学入試には平成36年度実施分から影響が出る。必修科目の見直しが行われ、社会科が大きく変わり、歴史総合・地理総合・公共（いずれも仮称）の設置される。また、合教科型科目として数理探求（仮称）を新設し、数学と理科の知識や技能を総合的に活用して主体的な探究活動を行うことを目指す。内容的には **teaching** から **learning** への転換を図り、教員主体から学習者中心の主体的（アクティブ）・対話的（インタラクティブ）で深い学びの機会を与え、資質・能力の3つの柱＝「学力の3要素」を育むものにする。ただし、学習内容は削減しないので現在と同等の内容を同じ時間内で、しかも対話型で行うことになり、学校現場の教員には難題が突きつけられることになる

- ・新テスト

- ① 高等学校基礎学力テスト（仮称）

基礎学力の定着度合いを把握する仕組みで実施される。平成31年度から施行実施を開始。任意で基本、学校単位での受験。科目は国語総合・数学Ⅰ・コミュニケーション英語Ⅰの3科目を上限とする。平成34年度までは入試・就職には使わない。それ以降は更に検討となっているが、試験の公平性が保たれない恐れがあるため入試には不向きである。

- ② 大学入学希望者学力評価テスト（仮称）

現行のセンター試験に代わるものとしての位置づけ。平成32年度から現行の指導要領に基づき実施する。国語・数学については記述式問題の導入、平成35年度までは短文記述式（80文字程度）、平成36年度からはより文字数の多い問題を導入。記述式問題の評価は段階別表示、マークシート方式の問題は従来通り1点刻み（ただし、思考力・判断力がより求められる作問へ改善される）。英語のスピーキングについては平成32年度当初からの実施を目指している。当面はセンター試験の延長線上の試験プラス α で実施。センター試験での英語の撤廃を目指しているもので資格・検定試験の活用のみで英語の4技能を評価する方向での変更と思われる。

- ・調査書、学修計画書等の提出書類

「学力の3要素」を多面的・多角的に評価するために、本人が記載する「活動報告書」・「学修計画書」等の積極的な活用をすると同時に、小論文やプレゼンテーション等の導入、充実により多様な評価方法を採用する。教員等が作成する「調査書」・「推薦書」はフォーマットから見直しが図られ、調査書の現行様式のA3片面

一枚の制限が撤廃される。本人、教員いずれの作成書類についても記載内容（活動歴、表彰・顕彰、資格・検定）のエビデンスが必要になる。

・もう始まっている新傾向入試

「大学入学者選抜改革委託事業」の5分野（人文社会の地歴公民・人文社会の国語・理数・情報・主体性等）に全国21大学等（国公立大学13、私立大学6、独法1、学会1）が採択され国からの支援を受け、「学力の3要素」を多面的・総合的に評価する入学者選抜への転換・充実に向けた取り組みを行っている。平成29年度入試で実施された新傾向入試の成功例として福井大学国際地域学部の高次接続型入試（センターを課さない自己推薦型 1次試験：レポート 2次試験：プレゼンテーション）、お茶の水大学のAO（新フンボルト）入試（1次試験：90分2コマのセミナー受講後30分のレポート作成、出願書類：活動報告書、外国語試験成績、研究発表ポスター等 2次試験：文系は図書館入試 課題レポート作成とグループ討論・面接、理系は実験室入試 自主研究のポスター発表・質疑応答）などが紹介された。

・まとめ～これからの入試改革の方向性

① テストはまだよくわからない

⇒新テスト実施方針の策定・公表に注目、同時期に大学入学者選抜実施要項が大学に伝えられる。

② 数日間かける入試、事前のプログラム受講を求める入試—主体性・協働性・多面性

③ 提出書類の評価—高校時代の経験が重要になってくる *エビデンス(証明書類)が必要

⇒勉強しているだけではクリアできない入試

④ 総合問題、小論文等の導入—考える・書く

⇒複数の知識・情報を利用して問いに答える

⑤ 学力検査はなくなる—学力プラスαの力で評価

⇒AO、推薦入試における学力不問、軽視の文言を改める「大学入学者選抜実施要項」の改訂。改革入試に不向きな生徒の救済のためでもある。

(3) 質疑応答

Q 記述式問題の段階別評価とはどのようなものですか？

A 結論は出ていないが、アイデアとしては四分位数、パーセンタイルで出すであろう。1点刻みではなく20くらいのグレードに区切ってグラデーションにする。

Q 英語の外部検定・資格試験のうちどれを採用する流れなのか？

A 現在の外部テストの活用の主流は各大学で複数のテストの中から選べるようにして換算している。換算表に基づくか、センター試験を満点扱いにするかである。今後は難易度を認定したテストのみがセンター試験にとって代わる。受験産業等が新たな試験を作って、認定を受け採用される可能性もある。

Q 現在、総合的な学習の時間はある程度、学校独自の運用（進路研究や宗教等）で読み換えることが可能であるが、新課程の総合的探求という科目では設定内容をどうすればよいか？

A 結論は分からない。何でも読み換えてよいとはならないと思う。諸活動で使っても構わないだろうが、単なる見学や活動で終わらせないで、考察・検証を加え、研究・探究といった学問レベルにまで高める必要があるだろう。エビデンスが残るものが望ましいと思う。

Q AO・推薦入試は入学者定員の30%～50%のレベルに増やすのでしょうか？

A ペーパー試験のみの入試を文科省は嫌っているので、学力のみの入試定員は減らさなければならない。そのために後期の比率を増やすのも方策だし、AO・推薦の比率を増やすのも方策であり、知識偏重ではない入試の定員は増えるだろう。ただし、AO・推薦、一般入試の枠組みは分からないが、知識・学力は評価する。国公立大学の入学試験では学力不問はない。

Q① 大学入学希望者学力評価テストについて当面は国数英の3教科ですが、理社の実施についてはいかがでしょうか。

② AO・推薦入試で入学した学生と一般入試で入学した学生の違いを教えてください。

A 比較的学内で闊達に振る舞い、キャンパスライフをエンジョイしているのはAO・推薦入試で入学した学生で、一般入試で入学した学生はおとなしい印象であるが、学力は高く進級・卒業に支障をきたすことも少ない。AO・推薦入試で入学した学生は1年次の英語、理数分野の数学、物理がクリアできるかどうか鍵である。入学前にきちんとした学力の補てんが必要である。

(4) まとめの言葉 : 静岡北中学校・高等学校 廣住 雅人 校長

急な呼びかけにもかかわらず、多数のご参加ありがとうございました。昨今の教育改革・変革への対応については“解なし”とも言われるような課題も多く、学校現場に研究・開発を求められているようにも思えます。各校での取り組みや実践・活動事例を表に出してお互いに高めあって、乗り切っていきましょう。

5 アンケート結果（回答意見）

Q1 本日の講演の感想をお聞かせください。

- ・高大接続改革の現時点での状況がよくわかり、大変有意義であった。
- ・もうすでに改革の方向性を見据えた、福井大・滋賀大・お茶の水大等の事例は大変参考になった。
- ・今後の策定・公表に注目しつつ進路指導に活かしていきたい。
- ・期待はしていなかったが、結論としては新テストはまだよくわからないということだった。
- ・従来の知識中心の学習からの脱却を目指すと同時に、入試の多様化やアクティブラーニングなど新しい取り組みに対応する必要性を感じた。

- ・今後も情報収集を怠らないようにしたい。大きな変更が予見される教科についてはカリキュラムの検討が必要になると思う。

Q 2 今後、進路指導研修会としてどのような内容を希望されますか。

- ・本日の講演の続き。現在検討中のものがはっきりし次第、本日のような講演を。
- ・定期的に雨森先生から今回のように報告していただけるとありがたい。
- ・講演会と他校の進路担当者との情報交換の2本立てで企画していただきたい。
- ・ICT教育への各学校の取り組みの紹介。
- ・進路指導の具体的方法(テクニック)などを学べる内容。
- ・表現力や問題解決能力、協調性を高める取り組みについてのケーススタディ。

【記録：副部会長 静岡北高等学校 教諭 大橋久夫】